

# 道徳と知性（試論第二）

遠藤貞吉

は し が き

① 試論第一において、私の倫理観の極大体をのべた。その議論の進め方は甚だ常識的であり、殊に結論は極めて安易無難な綜合であると感じられるに相違ない。まづそれについて若干の弁明を試みたい。

一、議論或は思索の進め方が常識であるとの点は、それはむしろ自覚しつつそうしているのである。勿論直接の教授により、或は著述により啓發され教示され、多くのすぐれた思想家達の思想内容や思索方法が、いつのまにか或は深く或は浅く、或は多く或は少く、私のものとなつていくかもしれない。それはもう借り物でなく、丁度食べて消化した食物の如く、今は我ものであるといえるだろう。こういう意味のものも含んで、我は正直に自分の体験、自分の反省思考によつて倫理観をのべようと試みるのである。云いかえれば、特定の大思想家の思想をとりあげ、これに沈潜し体得し理解し批評する事によつて私の倫理観をうちたてようと云うのではなく、又特定の大思想家の思想的立場に立つて、私の倫理観を展開しようというのでもない。規模は小さくても、少からぬ欠陥はもつていようとも、ともかくこれは我の造つたもの、従つて私としては自由に使用ができ、又改造増補も割合自信を以て施す事ができるものを造る。これがこの試論を企てた動機である。

自然科学的知識において、一つの知識の真理性が確立されたなら、少くも通常人としてはかゝる知識に到達した経路、理論の展開、実験過程等について知らなくとも、或は知ろうとしても到底理解できないとしても、それはその知識の応用には差支えない。然し道德的知識或は見識は反省思索の結果としての知識だけでは何の役に立たない。その知識の背景或は根拠たる知情意渾然として融合した全一的の精神があつてこそ、従つてその思索展開の過程が自分のものであつてこそ、実践の力をもつのである。見識という語さえ、單なる知識でなく、全一的精神の上に立つ知識について、はじめて、そう呼ぶことができる。

私の造つた私の道具はそれを他人に見せ、他人の批評を仰ぐ必要があるか。吾々は社会共同生活を営み互に思想感情を疏通しているのみか、主張し論議し批判し修正し、更には芸術作品についてこれを鑑賞する事、解説する事、批判する事ができる。又学問体系が組織され益々精密確實になり拡大されていく。こうした事實は凡ての人の個性の差異に拘らず、一般に通ずるものあるを明示している。この普遍性を信ずる故に、私の造つた私の道具も又誰か他の人にも用いられる、或は他の人が自分の道具を作るとき参考にもなると思うのである。そして只ひとり自分の反省でなく広く他人の批判を仰ぐ事が改善のために必要である。

右のような意味で常識的な立場に立つことを避けなかつた、否求めて常識的な立場に立つた。こゝにいう常識はそれ故に正確とかごまかしとか、間にあわせの意味ではない。通常人としてできるだけ納得のいくようにとの意味である。

二、前回の試論において、道德の意味をいろいろの立場から述べた。何でもかでも都合のよい性質をかきあつめたようである。然しその背後にある私の考はこうである。倫理観において嚴肅主義と快樂主義とは正に正反對の立場である。倫理學說としての快樂主義の主張には不十分とか欠陥とかいうのでなく、むしろ自己矛盾を含んでいる。真剣な人間としては嚴肅主義にひかれる。それに拘らず、快樂という語に拘泥しないで、快感とか満足とかのより広い意味をもそれに含めるなら、如何に嚴肅主義に徹底しても、吾々は道德は凡て快感、満足の感と無縁とはしないであらう。道德

一方には如何な困難、不利を排してもせねばならぬ、してならぬという峻烈な面をもつと共に、かゝる命令に従うことは本来人間の性向でそれは困難ではあつても、厭わしいことではない。もしかかる命令に従い得たなら、そこにはそれこそ眞の満足があるのでなければならぬ。

他方人にとつて瞬間的に愉快なこと、満足なこと凡てが本当の意味で愉快であり満足であるとはかぎらない。むしろより大きい苦痛不満を伴うものも、或は只瞬間的の愉快満足に止つてそのため苦心や努力を払う価値の全くないもの、或は自分のみはよくても他人を損い結局は自分のためにもならないものが少くない。眼前の快樂快感には超然として、恣にならうとする自己を克服すべき場合が多いのである。

無難作な綜合と思われるものは、右のような二つの方面の調和或は調節から出たものである。

### 知性と快樂主義の超克

人として獲たいものを得、為したい事を為し、成りたいものに成るという事は誰にとつても願わしいこと、嬉しい事である。人が快を欲するとか幸福を欲するとかいうことは、畢竟獲たいとか為したいとか成りたいとかの要求希望の達せられる事で、そういう事をはなれて快とか幸福が独立的に存在するとは思われない。人間は凡て快を欲する幸福を欲するとは、心理的事実であり、云わばAはAであるという同一律である。それ故道德を絶対に快感幸福から絶縁せしめようとする事は不可能である。

しかし倫理學說として快樂主義を主張する事は誤りである。事實として快樂主義と呼ぶ倫理學說がある。もしそれを學說とするなら、普遍的な心理的事実をとりあげて、もしこれが動かす事のできぬ事實であるならば、或は人としては必ずこの心理に支配されているものとするなら、どのようにして快感或は幸福を求むるがよいか、如何な快感幸福を求むべきであるかを考察する処世訓ともいうべきものである。

今かりに個人が全然社会から独立して生活できると仮定する。人間には已に複雑な分化した心意の働きがあり、欲求においても感覺的なもの、理性的なものがあり、同じ感覺的なものにしても性的欲求、飲食の欲求、好奇的欲求、活動の欲求、休養の欲求等無限に異なる欲求がある。これ等欲求はたとえ充たされても又別な欲求を生じる。欲求を充すときそれと共に苦痛を生ずることもある。同時に種々異なる欲求が並び現われる事もある。もし人が犬や猫の如く本能衝動に動かされ、その時その時の生活を営んでそれですめば問題はない。然し人間には已に或る程度の知性が具わり一貫した人格性がある。群がり生じる、又相つづいて生じる多くの欲求の中で取捨選択をなし、本来輕重の別を立てなくてはならない。かくて要求は知性の支配をうけなくては、人に快感幸福をもたらすものとならない。

況んや社会を全くはなれた個人というものは實際あり得ない。社会共同生活を営むに当つては各個人の間に相当大きな埒、制限を設けなくては社会の安寧秩序は確保されず、従つて快感幸福は与えられない。ここには知性の支配が更に必要である。

快樂主義は主義として自己矛盾をその中に包蔵している。快樂主義としては快樂さえ与えてくれるなら、その快樂を与えらるものは何であつても、かまわない筈である。然るに感覺的快樂はとかくそれに耽つて却つて苦痛を導き、耽らすともその感覺そのものが苦痛を伴うものであり、或はあまりに瞬間的であり、或はそれによりてより価値あるもの、結局より大なる快樂或は幸福を阻害するものであり、或はそれによつて仲間の間に嫉妬や争や怒を招くものである。かくて精神的快樂幸福がより安定的永続的生産的であると考えるに至る。もし或人にとつては精神的快樂或は幸福が得策であらうという単なる示唆を与えるだけならともかく、精神的快樂或は幸福が感覺的なそれよりも価値があるとか、或は精神的なものを選ぶべきであるというなら、それはもはや一般的な快樂主義でなく精神的快樂主義である。且つ幸福ならんために芸術家が創作をなし、教師が人を教え、喫煙家が煙草を吸い、銀行家がゴルフをするのでなく、彼等がしたい事、せうに居れぬ事をするので心に満足があり、幸福を感じるので、精神的快樂主義も本當をいえば精神活動主義

というべきであるまいか。快樂主義は快樂そのものの幸福そのものが本来の存在と誤想するから、とかく不自由不如意の事のみ多いこの世では自らの命を絶つことが却つて幸福であるという逆説<sup>⑤</sup>に陥つたのである。

快樂主義或は幸福主義は又、もしそれが快樂或は幸福を意識された直接の目的として追求するものである、そこに明らかな心理的の誤がある。釣の好きな人はその好きな事をするところに快感幸福を感じる。研究に没頭する人、社会事業につくす人、飲食の樂に耽る人皆同様で、幸福ならんがためにそれ等をするのでなく、それ等の事をしたい要求が傾向があり、この要求傾向を充すとき満足を感じる。もし幸福になる事を直接目的とするなら、果してかゝる幸福が得られるかどうかの掛念のため却つて幸福感が妨げられる。幸福を念頭におかないとき却つて幸福が与えられるという矛盾が生じるであらう。

以上のように分りきつた事をくどくど論じた事は、今日の世間の風潮に感ずるところがあるからである。さなくとも一般世人はとかく幸福が附随物である事を忘れ、それを本質的のものとして追求している。その幸福を生むべき事柄そのものの過程そのものをかえりみない。然るに新憲法において凡ての人の幸福を保障し、新教育法規において幸福な生活を営み得る能力を養うことを教育目標の一としている。その事は決して誤りでないけれど、皮相的に解せられ、或は扱われて、世人は又年少者は各自の幸福そのものがそのまゝに価値あるもの、是認さるべきものゝように誤解している。私は学校教育においても、家庭の生活態度においても、はたまた新婚の家庭を祝福するにおいても、幸福の本質を明確に理解させる必要があると信じる。

それにかゝわらず、道徳義務が快感満足幸福の感と常に相反するとか、全く無關係である、或はあるべきだとする事は誤りであると思う。但しそれは附随的關係であり、又両者の結合はその当事者なり、その世の中の状態の正常を示し、もし不一致であるならどこかに異常があることを示している。異常時には快感満足幸福を捨てゝも義務、道徳を遂行すべく、しかもかゝる人に対してはこのときにさえ、否この時にこそ眞の快、満足、幸福の感が与えられるのであ

ろう。

或る思想の流派や宗派では克己禁欲をとき、難行苦行につとめるが、それはそれ等のことそのものが目的でなく、彼等の実践的態度であり、彼等の究局目的を達するための手段又は過程である。彼の目的を達したとき彼等とても喜び、満足を感じるのである。要するに素朴な又皮相的な処世観であるところの快樂主義は知性の發達と共に克服されるが、それは快樂の排除でなく、その意義或は価値の変化であり、人間が生物學的基盤に立つかぎり、否人間が人間であるかぎり何等かの仕方でのそれとの關係交渉は絶つことはできない。絶つべきでもない。

## 科学及道德における知性

こゝでは認識論上のむづかしい議論をするつもりではない。どこまでも常識の立場に立つて學問をする場合の知性と道德的行爲における知性の働きの相違を考察してみたい。知性の働きそのものは両者において本質的に異なるものではないであろう。只立場或は態度が異なる。たとえば交叉点における交通について考えてみる。赤燈がついて歩行者は皆停止して車の通過するのを待つている。車は凡て通つてしまつた。まだ赤燈がついてゐるが、交叉点における交通整理の様子を知つてゐる人々には三四秒で青燈になる事がわかつてゐる。このとき只合理的に考えて横断をはじめる人がある。赤い間は横断していけないとの考からまだ停止してゐる人もある。停止してゐる人の中にはたとえ三四秒で色が変わるとしても赤いうちに横断を始めては交通整理の様子を理解しない年少者や田舎者のためには、文字通りに規定を守るべきであると思つてゐる人もある。只合理的に行動するのでは必ずしも道德的にならない。

第二のたとえ。人を訪問するに次の日曜たずねたいと思うが、何時頃が都合がよいか。ではその頃行くつもりだが、あてにしないで待つていくれという交渉は合理的かもしれないが実は迷惑な約束である。くる意志があるとわかれば多少の不便は忍んで待ち受けるのが人情である。それを思うなら、万一の場合は自分が無駄足をふむつもりで、約束な

どしなで行くか、約束すれば十分実行できるような手配をしておくべきである。待ほけをくわせる人を不道德とまでは云わないでも、そうした迷惑をかけない心掛の人は道德的にはより高いとか、人間としてはより立派というべきでなかろうか。

たとえの第三。太平洋戦争において吾国の軍人達が残虐行為を犯したと非難されている。少数はたしかに残虐性を疑われても仕方のない軍人もあつたろう。教養の低いところに誤つた鄙懐心を吹きこまれて残虐を行つた軍人も少くなかつただろう。敗戦者の心理からして自衛のため恐怖心のため異常心理のため残虐であつた軍人も多かつたろう。残虐はどんな場合も大きい不道德であるが、それを行つた人間その人の道德性は同一程度ではない。知性や想像力の弱さが人を不徳に導く。

例の第四。電車で子供を抱いている女が立つているのに気がつきながら、席を譲ろうとしないばかりか、自分の横に手提鞆をおいている壮年紳士がいる。それは必ずしもその人の不人情によるものでもないらしく、そうした女の人の不自由に気がつかず、自分の横の鞆が人の邪魔になる事に気がつかぬための事もあるらしい。教育を受けても教養がないと批評されるのが、この事である。つまり外觀程に賢しくないためである。

右のような例から私が考えるのは、道德とか人間らしくあるとかは、視野の広いこと、いろ／＼の立場を考慮する事、想像力に豊かなこと、などと關係が深いという事である。

記憶、想像、推理等の心理作用そのものは学問の研究において働くときも、日常生活に於て働くときも同じである。然し自然科学の立場などは徳不徳、美醜、好悪等の顧慮をはなれ抽象的な専ら理知的の立場に立ち、誰でもほぼ同じ態度に立つ。これに対し日常生活、そして倫理問題が屢々提起されるような立場では、人は知情意の凡ての働く全人間的の立場、又自分だけ孤立した立場でなく、自他の關係、又他人の立場等なるべく広くを撰取した立場に立つ程、その判断が妥当的である。その究局、即ち一切を包摂した絶対的境致は理念であつて現実の人間としてはこれに接近する

事をつとめ得るのみである。それで前の試論でのべたように、場における評価と、場についての評価の二重評価を道德に於ては認めたいと思うのである。

## 良 心

良心、義務意識、道德的觀念など呼ぶものはそういう特別の存在があるわけではなく、人の心が境に応じて働き出す姿であると思う。生物において未分化的な全体も部分も同じようなものが次第に發展して分化に分化を重ね、複雑巧妙な機構を造りそれに応じた作用を営み得るようになる如く、精神的存在においても云わば動向、傾向、力といったような渾然とした、又漠然とした働があり、それが知情意といったような各面に分化し、各面更に分化し、分化しつつも相互に調和を保ち、全体性を形作っている。表面的には専門化して働いているように見える知情意の働は、自覺により或は困難にあつて、深化されるとき、次第に全一性を取り戻してくる。良心というものはこのような全人格性を背景とした認識である。日常生活において殆んど習慣的に機械的に行動しているとき良心と呼ばれる程のものは働いてこない。多少思考を要するような問題に出会つても多くの場合功利的に或は体面の上から考え、己が過誤に対してもまずかつたとか高々すまなかつた位の意識しかないかも知れない。事次第に重要になつても尙小さい自我に執着してしか考えられぬ者がある。それは學識のある或はなき小人、能力のある或はなき小人。位の高い或は低い或はなき小人である。道德的に高い人、人間らしい人は事たとえ輕微に見えても尙その有ゆる關係から判断を下す。左様な人でも時には小我に執われ、或は人間の低い面の方がつよく働くことがある。それ故人格者とか高德の人とかの形容は或る一人の人に前後一貫して適用さるべき形容でない。大体の傾向から善い人と呼ぶことのできる人はある。聖人というようなものは架空の概念である。さような聖い人間は善い人間が死んで、彼の欠陥過誤が忘却されるが、理解され寛恕されるときにはじめて存在する。或は芸術作品のように創作されるかである。かように云う事は人間の価値をおとすためではなく、却つてど



のような人でも貴き可能性をもっている。決して互に輕蔑憎惡の心をもたず、新鮮な感じを以て相接したいためである。

良心の苛責とか命令とか權威とよぶものはどこからくるか。吾々の心はそのときときによつて大きくもあり小さくもある。吾々の精神の中に働く知情意的内容が豊富なとき貧弱なときがある。それ等内容の統一されたときの方向が意志として現われる。この全一我が部分我に對し良心として働くのでなからうか。それ故良心の働きは人によつて強弱に無限の差がある。然しそれを欠くものは狂者か白痴である。そして法律や慣習や体面によつて支えられねばならぬ世の中でもある。

所謂良心の權威は實際においては、純粹に全体我の部分我に對する關係からしてのみ生じるのではなからう。功利的な利害の念、体裁や名譽を求むる心、羞恥心、宗教的意識、迷信等がこれに絡んで強制拘束の力を強める。然しそれ等の絡みつく核は部分我或は分裂我に對する全一我、統一我で、ここには全意識が完全に統一され、純一無雜な心の状態、或は至誠と名付けられる境致がある。

ギリシア人には善美(カロカガトス)なる語があつた。プラトンの對話篇<sup>④</sup>に或る行が美しいから善い、有益だから善いというような論法を見出す。邦語においても善いということは美しい事を意味し、或は有用を意味する。全人格を背景とする知性の選んだ行為が、善であり、美であり、有益である事はむしろ当然の事であらう。シルレルの美魂の思想を想出すのである。

### 知性を通じての道德的陶冶

道德的修養は實踐の問題、習慣の問題であつて知識を与える事によつて道德を涵養せしめようとすることは無効だといわれ、往年の修身教授が笑い草として引合いに出される。最近高等学校における倫理教授の主張に對しこれを一笑

に附し或は憤慨するものもある。私が不審に思うのは有力な学者なり思想家が反対すると、他の人々も自ら十分に考えないで殆んど附和雷同的に一緒に反対する事である。批判という事が模倣的に無批判的になされるのは奇怪である。私はむしろ知性の陶冶が道德の涵養に大切であり、絶対必要とさえいいたい。私はそれを学内の講義でも又学外の講義<sup>⑤</sup>においても主張してきた。どんな小さな子供でも合点のいかない命令や指示には従わない。剛情な青年も納得すれば案外指導しやすい。ガリレオが一旦地動説の撤回を約しながら「でも動く」とつぶやいたという逸話は人の信念は殊更につとめないでも自らを主張することを示している。昔の修身教授は実践的道德を只口頭で説いた、やゝもすれば熱意抱負信念を失つた老人、準老人が説いたところにその無力な所以のものがあつた。少くも高等学校以上の生徒には人生観、世界観、哲学、倫理学、理想等の形における道德の理解が必要である。中学校以下、たとえ専ら実践的道德の陶冶に努める場合においても知性の協力がなければ無効である。単なる知識でなく信念として、それは獲得されねばならぬ。生活經驗を通じての道德觀念の修得道德的態度習慣の養成の必要はいうまでもないが、その生活經驗の場面の現状は如何。教育的に整備されたという学校においてさえ、いろいろの事情から姑塗、虚偽、妥協、形式化、人間的弱点等年少者の教育にふさわしくない処が、少くはないように見受けられる。学校にはやはり現実を超えたものが必要である。アランが教室を囲んで外界から隔てる白い壁は学校に必要だといつたのは必ずしも奇矯な言葉でないだろう。

## 諸 德 目

日常生活においては普通の場合、何をすべきか、すべからざるかは明白であつて、殊更考えてみる必要もないようである。普通あげられている徳目は別に疑われる事もなく、反省される事もなく、そのまゝ是認されている。然し少し立入つて考察するとかゝる徳目は並列的のものでもなく、系統的に分類されているわけでもない事は容易に認められる。まず正直はそれ自身において要求される。正直とは倫理的な命名で、眞実、矛盾なき統一、内外の一致、論理におけ

る自同律と同じである。學問の求めるものは眞実、真理である。内心にあるものは外に言語表情動作となつて表出されるのが心理の自然である。嘘の發見器が機械として信頼できないに拘らず、そのようなものが考案されるということは眞実、正直が常態で、虚偽、嘘が異常な事柄であるとの信念を示している。正直者が馬鹿を見るような世の中であつてならないが、考え方によれば、正直者が大多数であればこそ、不正直な者がそれに乘じて利益を占め従つて正直者が馬鹿を見るという結果になるのである。寶錢もそれが多くなれば贗錢の甲斐はなくなる。嘘も方便ということがあつて、事によつては嘘も是認されるようである。不治の病にかゝつてゐる患者に対し、医者眞相を明にするよりも、むしろそれをかくし或はごまかす方が人間的であるとされる。全く左様である。それは人間性の不完全からくる止むなき事柄で、もし患者が自らの病の不治なるを告げられても少しも不安懊惱を感じない程の人間ばなれた者であるなら、やはり眞実を告げられるべきであり、その方が自他にとつて利益ある筈である。要するに正直はそれ自体において徳である。公平正義もその事自体において徳である。しかし、具体的な現實に於いて何を公平とし、正義とするかは正直の場合の如く簡明に決定できないで、結局は道德論の基本問題にはいかなければならない。

それに対し勇氣はたとえばギリシア道德においては主要な徳の一であるが、勇氣をその本来の意味に解して、恐怖躊躇の欠如又は克服とするなら、勇氣は凡て必ずしも徳でなく、如何なる形を以て勇氣が現われるか、或は何のための勇氣であるかが重要な問題となる。節制についても節制その事は得策であろうが、いつも道德的の意味をもつとは限らない。勇氣の場合と同じことが考えられる。

この徳の考察について私の直接の目的は、科学におけるような抽象的な推理知ではないが、やはり主として知性的理知的な判断力が道德において最重要な役割をつとめている事を指摘し、道德的陶冶における知性の重要性を強調する事である。今私はパスカルのいつてゐる二種の知を想ひ出している。

## 良心の小さい声

良心や神の知らせは静かな小さい声と屢々よばれているが、それは型にはまつた形容にすぎないか。良心のさゝやきという表現もある。實際良心の働きはまず、すまぬ気がする、心がとがめる。やましい感じというような形ではじまり、次第に全意識を支配するようになる。もしかような静かな小さい声に、あくまで欲情が服従しないで、両者の間にはげしい対立がはじまるならば、こゝに良心の苦悶が起る。過去の罪過に対し、良心が批判宣告を下すとき、それを良心の苛責として感じる。しかし良心はいつも同じ強さで働くとはかぎらない。人々によりて異り、又同じ人においても時を異にして異る。それは芸術的天分のように天性もあり、又修養練磨により洗練深化される事もできる。教育を左程うけないでもそうした素質の豊かな人もあり、高い教育をうけつゝも割合その点低劣な人も少くない。たとえば過去の原爆について、又将来の原爆水爆の可能的危険について、軍人政治家学者がどれ程に心を傷めているかを見るがよい。芸術的天分はたとえ乏しくとも、直接他人に危害を及ぼすおそれはない。然し道德意識良心を全く欠くならば、社会の安全幸福は望み得られない。かくて凡ての人、殊に道德的に低い人をして埒外に出さしめないため、法律や社会的制裁や見えや打算やがある。且つ芸術は多分に情緒的な事柄であるが、道德には知性が多分に働く。知性の啓發涵養は道德陶冶の主要な道であり、人間において知性はその本質をなし、人間は本来知性的存在であるとせば、可能的には必ず良心を備うべきものである。良心としての知性は、科学的知性のように抽象的な云わば平面的な立場に立つ理知でなく、できるだけ多くの他人の立場をも考慮に入れた、卸ち社会化された、豊かな想像力と結びついた聰明とか知慧とかよぶべき知性である。はじめはそれは一種の本能の如きで自覺されざる知慧が情意と渾然融合している。それはやがて分化し綜合され内容は豊かに範圍は広くなつて行く、しかし分化は必ずしも調和的に行われず、知識を貯えた不徳漢、無識な有徳者といったものもできる。道德の進歩は、道德性そのものが芸術性と同じく各時代を追つて發展するものでなく、潜在的

のものが顕在的のものになる程度、渾然たる融合体が分化し、しかも相互の均衡を失わないでどれほど發展するか。複雑な物的・心的生活条件の中に道德的原理がどれほど現實化されて行くかをいうのでなからうか。かく考えて私は知性陶冶の重要を重ねて主張するものである。

註

- ① 論集第二号、ソクラテス倫理の示唆。
- ② ギリシア倫理学におけるヘゲシアスの思想。
- ③ *Kalokagathos, Kalokagathia* でギリシア哲学史或は哲学辞典を参照。
- ④ 平素注意して参照箇所を控えておかなかつたため今はつきりそれ等の場所を指摘できないことを遺憾とする。しかしそういう論法が自己普通の考え方のように用いてあるのは私のよんだところでも、決して一ヶ所に限らなかつたと思う。
- ⑤ 十数回の教職者のための講義にいつも知性の陶冶が、世間の考えている以上に道德的修養に大切なことを主張し、大抵いつもガリレオの故事をひいた。知的教育や科学教育に偏したといわれるのは只知識の教育、觀念の教育に了つて、知性そのものの教育でなかつた事による。私は科学における知性活動を一応理知なる名称を以てよび、抽象的の一面的として抑えたけれども、正しき科学教育は反省、謙虚、誠実の念を養ひ、科学的認識の限界さえ知らしめるものであらう。
- ⑥ *Alain* 本名 *Emile Auguste Chartier* 1868—1951 の教育論、邦訳がある。この論文集の中のどれであつたか、これ又已にのべたような私の心がけのわるいためにその個所の明示ができない。
- ⑦ 彼の「パンセ」の中で論じられている、繊細な精神と正確の精神の二種

Endo, Teikichi

Intelligence and Morality

Résumé

The standpoint of natural sciences are, so to speak, a common plane for all people, but in morality, all possible standpoints, not necessarily on the same plane, are to be considered. Double standard of moral value; evaluation of one's standpoint and that in one's standpoint. Nucleus of conscience is intelligence, with custom, punishment, benefit, praise or blame, etc. resting around it and strengthening or hindering it.